

医学の 医はなし

連載
53回

急性アルコール中毒

— 酒は百薬の長でもあり、
百毒の長ともなる —

福岡県
朝倉医師会病院 院長

上野 隆登

考古学的には有史以前の紀元前7000年頃から人間と「酒（＝アルコール）」との長い関わりがあります。また「酒」は百薬の長ともいわれ、多くの人に慕われ続けています。しかし、度を超すと「酒」による悪影響が出てまいります。そのひとつは、飲み方を誤れば死に至る急性アルコール中毒です。

急性アルコール中毒とは

急性アルコール中毒は、短時間に多量のアルコールを摂取することによって生体が精神的、身体的影響を受け、主として一過性に意識障害を生じるものであり、通常は「酩酊」と呼ばれています。一般的に、「お酒に強い体質」と「お酒に弱い体質」は、エタノールの体内の代謝過程で生成されるアセトアルデヒドのフラッシング反応の程度により、急性アルコール中毒の発生はあくまで血中のアルコール濃度、つまり飲んだアルコールの量に比例し、誰でもが陥る急性中毒です。

持続して飲酒すると徐々に血中のアルコール濃度が増加します。血中アルコール濃度が0.1%から0.15%で「ほろ酔い」、0.16%から0.3%で「酩酊」という順で酔いが進みます。また、飲みすぎると足元がふらつく、吐き気がするなどの症状も出るので、自分自身である程度は飲酒量をコントロールします。しかし、短時間で大量の酒を飲むと酔っているという自覚なしに危険な量のアルコールを摂取してしまうこととなります。この場合、「ほろ酔い」「酩酊」を飛び越えて一気に「泥酔（血中アルコール濃度が0.31%から0.4%）や「昏睡期（血中アルコール濃度が0.41%から0.5%）に到達してしまいます。飲み始めてから1時間以内に泥酔状態になった場合、あるいは酒量として、1時間に日本酒で1升、ビールで10本、ウイスキーでボトル1本程度飲んだ場合は急性アルコール中毒が疑われます。生命に関わる危険もあるため、こういった飲み方は強く戒められるべきです。

急性アルコール中毒の原因と診断

急性アルコール中毒はエタノールによる脳の麻痺が原因で、その症状は摂取したエタノールの量と血中のエタノール濃度按比例します。アルコールを摂取すると麻痺は大脳辺縁部から呼吸や心臓の働きを制御する脳幹部にまで進み、最終的には生命維持に関わる脳の中枢部分まで麻痺させてしまい、呼吸機能や心拍機能が停止し死に至ります。血中アルコール濃度が0.4%を超えた場合、1〜2時間で約半数が死亡します。

急性アルコール中毒の診断に血中アルコール濃度の測定は有用ですが、一般にはすぐにどこでもできる検査ではなく、その場合は症状と進行状況により、中毒の有無と重症度を診断します。その際、気をつけることは、アルコール以外による意識障害です。飲酒による運動失調と麻痺による転倒で頭部打撲や頭蓋内出血などが起こりえます。そのほか脱水や血圧低下による脳梗塞の発生、低血糖や高血糖による昏睡、肝機能悪化による意識障害などの合併の見極めも重要です。

急性アルコール中毒の治療

急性アルコール中毒の治療に関しては、軽症例は、体温を保ちながら観察し、嘔吐や脱水が見られる場合、対症的に対応します。重症例で昏睡の場合、気道を確保し、必要に応じて人工呼吸を行います。胃管チューブを挿入し、微温湯で胃を洗浄し、同

時に下剤を投与します。また、輸液によるアルコールの体外排泄を促進させます。血液透析が必要になることもあります。そのほか、嘔吐、脱水、低体温、低血圧、低血糖、呼吸抑制、代謝性アシドーシス、不穏に対する対処を行います。

急性アルコール中毒に気づいたら

急性アルコール中毒に気づいたら、呼びかけにはつきり応じるようであれば、そのまま安静にして様子を見ます。また体温が下がらないように気をつけて観察し、嘔吐による窒息にも注意が必要です。呼びかけへの反応が無かったり悪くなるようであれば、救急車での病院搬送が必要です。

これからの時期は、忘年会にクリスマス、お正月や新年会と、お酒を飲む機会が増える時期です。お酒は、適度に飲めば、ストレス解消やリラックス効果をもたらしてくれます。しかし、「百薬の長」といわれるお酒も、度を過ぎると、「百毒の長」にもなりえます。健康のため、お酒との上手な付き合い方をこの機会に見直してみましよう。

